明治大学
文学部
に

国語問題

はじめに、これを読むこと。

1. この問題用紙は十三ページある。
2. 解答用紙に印刷されている受験番号が正しいかどうか、受験票と照合し、確認すること。
3. 解答用紙の所定の欄に氏名を記入すること。
4. 解答は、すべて解答用紙の所定の欄にマークするか、または所定の欄に記述すること。
5. 解答は、必ず鉛筆又はシャープペンシル(いずれもＨＢ・黒)で記入すること。
6. 訂正は、消しゴムできれいに消し、消しくずを残さないこと。
7. 解答用紙は、絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。また所定の欄以外のところには、絶対に記入しないこと。
8. 問題に指定された数より多くマークしないこと。
9. **解答用紙は、持ち帰らないこと。**
10. この問題用紙は、必ず持ち帰ること。
11. 試験時間は、六〇分である。
12. 解答をマークする場合は、下の記入例を参照して、正しくマークすること。

(マークの記入例)

良い例	悪い例
●	◎ ⊗ ○

一

次の文章を読んで、後の問に答えよ。（本文の表記を一部改めた箇所がある）

吾々人間には、苦しみや悲しみや、悶えやいろいろ不安が襲いかかる。一生苦厄の連続だとも云える。これが為に、心に平静が保たれない。不幸が次から次に続いて来る。つまり安心（あんじん）が決定（けつじょう）されない。

なぜ、こんなことになるのか。この不安が高じると病気になる。神経が衰弱し、これが甚だしくなれば、気が狂い、自殺もしかねない。何故こんな悲劇が人間につきまとうのか。

それは詮ずるに、二元の巷に彷徨うことから起る。都合の悪いことに、二元は常に相対し相争う間柄である。争わぬ二元とてはない。その中に沈むから、平静がないのである。

しかも更に厄介なことには、人間はその二元のいずれかに加担する。いずれかを選び、いずれかを避ける。つまり貧富の二元界では、人は富を取り、貧を棄てる。強弱では、強を好み、弱を嫌う。だが吾々の生活は、貧や弱を恐れると絶えずそれにおびやかされて不安を感じる。人間は是か彼かの好悪の間に彷徨う。吾々の判断とは、要するに、是か彼かであり、然りと否との二元をいでず、しかもその内の一つを取り、他を捨てる事である。かかる二元の巷に彷徨うので、心に平和が保てぬ。ではどうしたら安心出来るか。心を安らかに出来るか。

要するに、二元を断ち切ればよいのであるが、どうしたら断ち切る事が出来るか。仏法が教えるのは、二元的な考えそれ自身が夢幻（まぼろし）に過ぎぬ事を見抜け、というのである。云い換えれば、高低、遠近、上下、左右の如きは人間が身勝手に作為した考え方に過ぎず、元来そんな区別はなく、従ってその各々に自性がないと知り抜けば、二元に迷わされぬというのである。

例えば、上下という、ここに坂があって、之を上り坂とも云えば、下り坂とも云える。坂自身に何も上下の自性はない。只、麓から見る人には上り坂となり、頂から見る人には下り坂と見えるに過ぎぬ。その区別は、人間が勝手に自分の立場からしか呼ぶに過ぎない。或立場を固守するから、同じ坂が上り坂とも下り坂とも見えるのである。つまり麓か頂かその一つを選

んで放さぬ故、一方は下り坂、一方は上り坂と決定してしまう。しかし坂それ自身にそんな［　Ⅰ　］はない。人間の選ぶ立場からの身勝手な見方による争いに過ぎない。

だから、この争いから離れるには、自分の身勝手な立場を捨てればよい。つまり「自分」を固守しなければよい。単に自分を棄てろと云ってもよい。これが出来ると、争いはなくなる。二元の争いがなくなれば、心に波風は立たなくなる。自分の立場への執着を棄ててしまいその繋縛（けいばく）をほぐしてしまうことである。執心が一切の悩み、悲しみ苦しみの因である事が分る。ある考えを固定させて、それに自分を縛ってはいけない。自ら足掻きがとれなくなるからである。人間はジジョウ（アジジョウ）自縛（じばく）に苦しんでいるに過ぎない。仏教は「無住心」を説くが、固定させた個所に住むな、という事である。つまり、二元界を心の住所とするな、ということである。その根源をなす［　Ⅱ　］を、捨てることが無住心となる所以（ゆえん）にもなる。ここに達せぬと、永遠に不安は去らない。つまり、人間は［　Ⅱ　］の故に自由になれない。自由とは、他人から自由になる事を意味するよりも、何より先ず［　Ⅱ　］から自由になる事である。不自由とは、他人の奴隷になる事よりも、自分自身の奴隷になる事を意味する。常に自分の主人であればよい。これが禅で云う、「随所作主」（随所に主となる）事である。一切の悲しみ、苦しみは自分が自分の奴隷になっている時に起る悩みである。

ではどうしたら、いつも自分の主人になれるか。例えば、人間には何事につけ、自分が負けたくないという悩みがある。それ故負ければ、苦しみや悲しみを感じる。だから負ける事におびえて心が静まらぬ。

どうしたら、この悩みから抜ける事が出来るか。それには、勝ち負けという二元の巷をぬけてしまう事である。つまり勝負という事が行われない世界に出てしまうことである。そうすると、負けるという事が、絶対になくなる。

適当な例を引こう。仮に激しい風が吹いて来たとする。この風に負けないようにするには、何かこれに抗し得る丈夫なものにすればよいと誰も思うが、風に抗すれば抗するほどそれに比例して大な抵抗をうける。だが、どうしても負けない道が一つある。風にとって一番の苦手は、暖簾（のれん）で風を受け流して、少しも逆らわぬので、風がいくらいきり立っても無駄になる。つまり、強い風も暖簾には歯が立たぬ。それは勝負を争わず、風と争う心を棄ててしまっているからである。風の吹くままに任せ

て、すべてを受け流してしまうからである。

A「のれんと腕押し」等という言葉は面白い。印度はこれで英国に負けずに済んだ。言葉を更(か)えれば、英国は印度に勝つことが出来なくなった。強い松の大木は、自らの力に任せて、風に抗するから、時として枝を折られたり、幹を倒されたりする。しかし弱い柳は、風を受け流してしまうので、強い風にもなかなか折れぬ。つまり柳は勝負のない世界に出てしまうからである。これは大した解決ではないか。

○

それで不安を去るには、

(一) 二元を幻と悟る事

(二) 自分を棄てる事

(三) 二元の争いのない世界に入る事

B このほかにもう一つある。例をひこう。夜眠られぬので苦しむ場合、寝よう、眠ろうとすれば、益々眼が覚めて寝られぬ。この場合寝る寝られぬの、二元の争いに身を入れているのでいよいよ苦しむのである。仮に、寝てよく、寝られなくともよいという道に出ると、直ちに静かになる。つまり二元の取捨をせぬのであり、両方を共に肯定してしまうのである。仮に、寝られぬ場合、これは自分に考える時間を与えてくれる為だと思うと、寝られぬ事に有難みさえ感じ始める。そうなるとどちらに転んでもよいことになり、心に安心が得られる。妙好人と云われる人々の生活を見ると、こういう考え方が大変に目立つ。例えば、人から蹴られたとする。普通なら腹を立てるのだが、別に腹を立てぬ。何故か。蹴られることで、自分の犯した罪業(b)の借金が少しでも減るので、有難いと考えてしまう。こうなると、腹を立てる心は消えてしまう。つまり感謝で、何もかも受取る生活をすると、心に安心が熟する。

他人が自分に冷淡であったら、自分の徳の不足に由来すると思えば、他人を怨まずにすむ。却って冷淡にしてくれたお蔭で、自分を責める事が出来たと思えば、二重の感謝になる。二元のソウコク(イ)から脱するには、取捨をせず双方を肯定すればよ

い。妙好人源左は、かつて時候の挨拶をしたことがなかったという。

「今日はお寒くて」とか、「雨が続いて困ります」とか、そんなことを云ったことがなかった。なぜなら、源左には寒くてもよし、暑くてもよし、晴れても有難く、雨で有難い心の暮しがあったからである。喰物の不平などはなかった。家人が「今日のは辛くはなかったか」と問えば、「塩気は有難いものだ」と云う。「甘くはなかったか」と云えば、「沢山食べられて有難い」という。それで、どんなこともそのままで、源左には最上であった。こういう信者には、二元も歯が立たぬ。だから二元の争いから去って、自在な暮しをすることが出来た。それで口ぐせのように「ようこそ、ようこそ」と云った。この「ようこそ」ですべてを受取るところに、妙好人の大した暮しがある。

かつて、良寛和尚は不在中盗人に入られて、何もかも取られた。しかしこの事を知った時、すぐ月見をして喜んだ。「盗人の取り残したる［　Ⅲ　］」これで盗人への怨みもなく、怒りもなく、恐れもなく、C悠々自適の暮しをした。貧乏して飯を焚く薪木もない時、「焚くほどは風のもてくる［　Ⅳ　］かな」で、静かなものである。貧乏の悲しみも、苦しみも良寛の心には近づかない。なにもかもそのままで、肯定される。こういう自在な人となることが、安心を得る道である。

いろいろある二元の対立の中で、人間に一番切実に迫ってくるものは、生死の二である。誰も死を嫌い、生を愛する。これには当然な本能が働くとも思えるが、しかし、この対立のために、異常な悩みや苦しみが伴うのは、ものの考え方に由来するとも云える。悟り終れば心経のいうように罣礙(けいげ)はなくなるから、恐れる死もなくなる。禅僧は「這裡(禅境)に生死なし」と云った。正にそうある筈である。

親鸞上人は、「極楽に生れるか、地獄に落ちるか、一向そんなことは存ぜぬ」と云われた。どう転んでも、安心を得ているからである。

妙好人源左の言葉は、たびたび他にも引用したが、友人から「どうしたら安心して死ねるか」と聞かれた時「ただ、死ねばよいのだ」と答えた。この「ただ死ぬ」が大した答えではないか。何もかも弥陀如来のお慈悲に任せきった身、今後、どうなる

か、そんな心配はいらない。ただ、死んで行けば、それで全くよい。これは弥陀のお慈悲への信頼で、生死の二を消しているためである。

仏とも鬼とも蛇とも分からねど
何になろうかと南無阿弥陀仏

これは木喰五行上人の歌であるが、称名にこれだけ積極的な信頼をすれば、何の恐れもなく自在の身になる。死も悩みの種とはならなくなる。六字にはどんなことも歯がたたないからである。六字の前に生死の二はその差別を失う。禅僧は「未生以前の面目」などという言葉をよく用いるが、［V］二に別れた巷に在れば、いつ迄も苦しみは去らぬ。二を越えずして、安心は保たれぬ。しかし、安心が何か苦悩の他に別に在るように思えば、再び二相に陥る。暗さのなくなる所が、直ちに光の在る所で、暗さと別に光があると思うと、再び明暗の二に分れる。先にも述べたが、心を固定させてそこを住居とするなと云うのである。だが、これは決して無住所を住所としろというのではない。囚われた心がほぐれればそれが無住所で、それが自在心即ち安心である。

親鸞上人は「ボンノウを断ぜずして涅槃を得」と云われた。むずかしい言葉であるが、二元に囚われないと、二元に在りながらも、そのまま二元にいないその風光を見得るであろう。ここに安心が現成される。

（柳宗悦「安心について」）

注　妙好人源左　――　妙好人は、信仰心の篤い人を言う。源左は、因幡国（現在の鳥取県）の農民（一八四二～一九三〇）。
心経　――　般若心経のこと。「罣礙」（妨げとなる物事）は、般若心経の経文にある言葉。
木喰五行上人　――　江戸後期、甲斐国（現在の山梨県）の僧（一七一八～一八一〇）。

問一　傍線ア「ジジョウ」、傍線イ「ソウコク」、傍線ウ「ボンノウ」をそれぞれ漢字に改めて記せ。

問二　傍線a「足掻(き)」、傍線b「罪業」の漢字の読みをそれぞれひらがなで記せ。

問三　[I]にあてはまる語として最も適切なものを次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

①　流動性　②　浮遊性　③　固定性　④　蓋然性

問四　[II](三箇所ある)にあてはまる語として最も適切なものを次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

①　彷徨　②　二元　③　執心　④　自我

問五　傍線A「「のれんと腕押し」等という言葉」は今の「暖簾に腕押し」という諺のことをいっている。次に示す諺の中で一つだけ、意味上これと類似しないものがある。その番号をマークせよ。

①　豆腐にかすがい　②　糠にくぎ　③　土に灸　④　油に水

問六　傍線B「このほかにもう一つある」とあるが、それを本文中から十五字で抜き出して、その最初と最後の二字を記せ。

(句読点は含まない)

問七　良寛和尚の、傍線C「悠々自適の暮し」は、その二つの俳句に表れているが、［Ⅲ］および［Ⅳ］に入る語の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① Ⅲ　外の月　　Ⅳ　稲　葉
② Ⅲ　窓の月　　Ⅳ　落　葉
③ Ⅲ　窓の月　　Ⅳ　稲　葉
④ Ⅲ　外の月　　Ⅳ　落　葉

問八　［Ⅴ］に入る文として最も適切なものを次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① 迷いとは、二が未だ別れない以前の面目に戻る事だといってもよい。
② 悟りとは、二が未だ別れない以前の面目に帰る事だといってもよい。
③ 迷いとは、未だ生をうけない以前の面目を失う事だといってもよい。
④ 悟りとは、未だ生をうけない以前の面目を施す事だといってもよい。

問九　傍線D「自在の身」になることを阻むものは何か、最も適切な語句を同じ段落の中より探し、五字で記せ。

二

次の文章は、『狭衣物語』の一節である。主人公・狭衣中将は、一途に恋い慕う姫君が他にいながら、法師に誘拐されそうになっていた飛鳥井女君を偶然救ったことにより恋人関係になった。互いに素性を隠し、名のりあうことはなかったが、女君は狭衣中将だと気づいていた。そのような折、女君の世話をしている乳母の東国行きが近づく。これを読んで、後の問に答えよ。

（一部本文や表記を改めた箇所がある）

かの飛鳥井には、乳母みな出で立ちて、君をさへひき具せむもいと心苦しう、さりとてとどむべきならねば、さすがに思ひ[a]嘆くに、人知れぬ音のみ泣かれて、「誰を頼みてかは立ちもとまらむ。山より深き谷に入らむも、さてこそは」など思ひはつるも、我が心と思ひ離れきこえ[b]むことは、忍びがたくあはれにおぼゆるも、かつはことをこがましき心と思ひたる気色の、いといとほしきを見るに、「さらば、なにかは下らせたまふ。[A]京にも、たよりなくてひとりとどまらせたまはむこそ、うしろめたなうもはべらめ。また我もいかにともおぼしめさめ。女は千人の親、乳母益なし。御男のおはせ［　I　］ほどなり。まいてかくやむごとなく、もの頼もしき人にもおはすなり。御心ざしいとねんごろなるを、ひき離れて、かかる東路に立ち添ひたまはむ、いとあるまじうかたじけなし」など、さすがにあるべきことをば言ひながら、いかに思ひかまふることかあらむ、この人のおはする宵、暁の門も心やすからず、鍵失ひがちにもてなし、つぶやく気配、御供の人々聞きて、[1]めざましうあさましきに、踏みこぼちて入りなまほしき折々ありけり。

殿にも忍びて、「誰と思ふにか。かくなむ」と申せば、「女の気色のあやしうのみあるは、この見し灯影（ほかげ）の女の、ありし法師に取らせむとてするなめり。さやうのことに思ひ[c]むすぼほれたるなめり」と心得たまふ。いと心づきなくゆゆしけれど、女君の有様の、「いでや、さらば」とてやむべくもおぼされねば、「いかにせまし。殿にさぶらふ人々のつらにてやあらせまし」とおぼせど、「人知れず思ふ[d]あたりの聞きたまはむに。たはぶれにても心とどむる人ありと、いかで聞かれたてまつらじ」と心深うおぼしければ、[B]さもえあるまじ。さらでは、さすがにここかしこと扱ひたまはむも、「いかにぞや」とおぼされつつ、「いまおのづから我と知りなば、え厭（いと）はじ。隠ろへぬべき所もありぬべくは、有様に従ひて」とおぼすなるべし。

女君にも、「老人の憎むなるべしな。ことわりなりや。頼もしげなりし法の師をひき違へて、かくものはかなき身のほどなれば。音無しの里尋ね出でたらば、いざ給へよ。わづらはしき人のさすがあれば、しばし人に知らせじと思ふほどに、かくおぼつかなく Ⅱ ものにおぼしたるもことわりなり。我は、何事にてかはあながちに知られじとは思ひたまふべき。言ひ知らぬ賤の女なりとも、これより変はる心あるまじきを、なほ頼む心はなきなめり」と恨みたまへば、「誘ふ水だにあらましかば」と、ものあはれに思ひて、「この別当の少将と思はせたまへるなめり。制すべき人ありなどのたまふは」と思ふにも、かりそめにうち頼みて、行くべきかたを思ひとまらむことはあるまじうおぼえながら、いとかくめでたき御有様にて、なつかしうあはれに語らひたまふを、行くかたの目やすからむにてだに、いかでかはあはれならざらむ。

注　飛鳥井　――　飛鳥井女君。帥の中納言の娘。親を失い、身寄りのない中、乳母だけを頼りに暮らしている。

乳　母　――　女君の乳母。夫を亡くした後、仁和寺の法師を頼りとしていたが、法師が女君の誘拐未遂を起こしたため、裏切られたと感じている。狭衣中将のことは、「別当の少将」と思いこんでおり、快く思っていない。

山より深き谷に入らむ　――　深い谷底に身を投げること。

女は千人の親、乳母益なし　――　女が恋をすれば、どれほど親や乳母がいても全く役に立たない、の意。

殿　――　狭衣中将。堀川の大臣(関白)の息子。帝からも可愛がられている。

灯影の女・老人　――　乳母のこと。

殿にさぶらふ人々　――　自邸に仕えている女房たち。

音無しの里　――　誰にも知られない隠れ家のこと。

別当の少将　――　検非違使庁(今の警察署と裁判所を兼ねる役所)の長官の息子である少将。

問一　傍線1・2を口語訳せよ。

1　めざましうあさましきに

2　いざ給へよ

問二　波線a～dの主語の組み合わせとして最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① a　飛鳥井　b　乳母　c　乳母　d　法師

② a　法師　b　狭衣　c　法師　d　乳母

③ a　乳母　b　飛鳥井　c　飛鳥井　d　狭衣

④ a　狭衣　b　法師　c　狭衣　d　飛鳥井

問三　傍線A「さらば、なにかは下らせたまふ」の意味として最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① 君がそのように思い悩んでいらっしゃるなら、どうして京をお離れになることがありましょうか。

② 君はそのように思い悩んでいらっしゃるのに、どうして私だけ行かせようとなさるのでしょうか。

③ 私はそのように思い悩んでおりますけれど、どうして君を京にお残しすることができましょうか。

④ 私がそのように思い悩むことがあったとしても、どうして君をお連れすることがありましょうか。

問四　［　I　］には打消の助動詞「ず」が入る。この語を適切な活用形（一字）になおして記せ。

問五　傍線B「さもえあるまじ」の意味する内容として、最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① 飛鳥井女君を邸の女房のように近くに置くことは、とてもできそうにない。
② 飛鳥井女君を見かぎらず恋人関係を続けることは、とてもできそうにない。
③ 一時の慰めでも、夢中になっている女性の存在を、なんとかお伝えしたい。
④ 本気でなくても、自分の恋を邪魔する者の存在を、なんとかお伝えしたい。

問六　Ⅱ　に入る語として、最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① まめなる　② あだなる　③ うるはしき　④ らうがはしき

問七　本文で述べている内容に合致するものとして最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① 狭衣は、自分の高貴な身分がわかれば、飛鳥井女君が遠慮して自分を避けると考え、ひたすら名を隠していた。
② 乳母は、狭衣が飛鳥井女君の元を訪れる時分や帰る時分、門を中々開けないようにして、度々嫌がらせをした。
③ 狭衣は、乳母が東国行きを急ぐことにより、法師と飛鳥井女君の結婚を、おしすすめようとしていると考えた。
④ 飛鳥井女君は、狭衣を頼って京に残ろうと思えるほど、狭衣の愛情を感じられず、最後は東国行きを決意した。

問八　傍線C「誘ふ水だにあらましかば」は、小野小町の歌「わびぬれば身をうき草の根を絶えて誘ふ水あらば往なむとぞ思ふ」（『古今和歌集』巻十八・雑歌下）を踏まえた表現である。小野小町と最も近い時期に活躍した歌人を、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① 伊勢　② 紀貫之　③ 和泉式部　④ 在原業平

三

次の文章を読んで、後の問に答えよ。（返り点・送り仮名を省いた箇所がある）

某侯令函人作鉄甲。甲成、欲試之矢。函人曰、「臣能以身当之。」乃擐其甲、而坐。命善射者、以強弓勁矢利鏃射之。中胸。a b A B 竪然而不入。侯曰、「善。吾既試其前矣。未知其後如何。」

C

函人釈甲而号而曰、「未慣作怯者甲。請辞。」侯曰、「吾過矣。」賞之以金。

注　某侯 ―― ある戦国大名。　函人 ―― よろいを作る人。
　　擐其甲 ―― よろいの胸を身につけること。　竪然 ―― かたいさま。

（『日本智嚢』より）

問一　傍線a「能」・b「乃」の読みとして、それぞれ適切なものを、次の中から一つずつ選び出して、その番号をマークせよ。

① まさに　② けだし　③ よく　④ なほ
⑤ もし　⑥ すなはち　⑦ あたふ

問二　傍線Aを書き下し文にすると、「射を善くする者に命じて」となる。これをふまえて、「命」と「善」の部分に返り点を付けよ。（送り仮名は不要である）

問三　傍線B「中胸」の「中」と同じ意味の「中」を含む熟語はどれか。次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① 中興　② 中央　③ 中立　④ 中毒

問四　傍線C「未慣作怯者甲」を、内容がわかるように口語訳せよ。

問五　某侯は、甲作りの職人の言葉をどのように受け止めたのか。次の中から最も適切なものを一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① 職人のあまりにも無礼な返事におこってしまった。
② 職人の武士に対する極めて深い理解に感服した。
③ 職人の甲作りの技術の高さと巧妙さに驚嘆した。
④ 職人の甲作りの方法の単純さにあきれてしまった。